



町、大崎市、亘理
震災の3年前に宮城大学教授に着任した風見正三氏は前々日まで大崎市都市計画審議会会長として会議に出席、翌日沿岸部での予定がキャンセルになり上京、テレビで震災の様子を見て愕然とする。「あのまま沿岸部にいたら、もうこの世にいなかつた。助けられた命だ。早く仙台に帰つて復興に身を捧げたい」。

ところが交通が遮断され戻れない。3月14日にアースディ東京2011で実行委員長のC・W・ニコル氏（アフガンの森財団理事長）らと世界へ震災の支援要請の緊急声明を出す。仙台へ戻ると、東松島市や南三陸町、大崎市、亘理



被災地に「森の学校」を建てる

宮城大学教授・副学長
ガイア都市創造塾塾長
風見正三氏 (58)

町、加美町等の震災復興事業に携わった。ここで東松島市立宮野森小学校、いわゆる「森の学校」誕生の経緯を振り返つてみたい。東松島市は宮戸小学校と被災した野蒜小学校を統合し、津波の心配のない高台に新校舎建設を決定。「学校づくりに協力してほしい」と依頼された風見氏は東松島市にニコル氏を繋ぐ。家族を亡くした子供たちを「アフガンの森 2泊3日の体験プログラム」へ参加させると笑顔が戻る。森の中だとみんなが命を吹き返すと確信した風見氏は全体のコミュニティデザインとその建築のコンセプトを作り、森の学校のイメージスケッチを描き、それを具現化するためには環境影響評価から敷地選定、コンクールート建築との比較検討、学校の機能計画、設計条件の設定、ランドスケープのイメージ構成、教育プログラムを取り纏め、建築家を選んで彼らにDNAを継がす。森づくりの専門家のニコル氏とは学校の裏山を一
緒に整備し森のフィールドを創る。さらに森の大切な生態系である谷戸をそのまま残すことにしておだわり、森と校舎の一体感を生み出した。また、子供たちや教員、地域の住民と何度も話し合う「コミュニティデザイン」のプロセスを実施しながら、エコロジカルプランニングといって自然を残しながら敷地をデザイン、完全木造で森と一緒に化した学校づくりの共感を得ていった。

森の学校は16年12月竣工。震災の年の4月入学以来、仮教室や仮設校舎での学校生活を強いてきた旧野蒜小学校6年生の卒業月に間に合わせた。森の学校は2017グッドデザイン賞を受賞。現在も校舎はピカピカで不登校ゼロ、残食率ゼロ、いじめもほとんどない。風見氏は「木は生きていて、生きできるコミュニティ、『ガイアヴィレッジ』を建設したい」と壮大な夢を語った。